

## 温泉と地域の関わり 温泉を通じた集いの場

はじめに

日本は3000カ所を超える温泉地が全国各地に存在しており世界有数の温泉大国といえます。奈良時代に島根県玉造温泉が「男も女も老人も子どもも、ある時は道路に行列を作り、ある時は海中を浜辺に沿って歩いてきて、毎日毎日集まるので市が立つほどである」（『風土記』）と書かれたように温泉は人々が集う場でした。そして現在も温泉は多くの人々をひきつける魅力をもつ場であり、温泉を核とした地域づくりが進められています。ここでは温泉と地域の歴史をひもとくと共に、温泉地の活性化を目指した取り組みについて考えてみます。

### 温泉地とはなにか

温泉地に行くとは宿に入り館内の大浴場でのんびりと手足を伸ばしてほっと一息つくのが一般的ですが、こうした形態は近代になり広がったものです。江戸時代には宿に内湯があることは珍しく、宿泊者は共同湯に入浴に行きました。地面か

ら湧きいでる湯はまさに神から与えられた地域の宝であり、共同湯は温泉地のシンボルでした。温泉地は中心的な共同湯（源泉）や広小路を核として、それを囲む湯宿と商店が賑わいを作り出していました。そしてこの集落部を取り囲むように高台に神社、そして自然との豊かな接触活動を図る共生域がありました。これらの温泉街を川、山など自然が包み込み、温泉街としてもまとまりと独自の魅力ある空間を形成していたといわれています。いまでも古くからの温泉地にはこうした空間の名残があります。

そしてもう一つ大事な温泉地の特徴は「交流」でした。古代から温泉地は病氣療養をする「湯治場」であり、各地から人々が集い同じ空間で長期にわたり滞在しました。湯治客は主に自炊をしながらか共同湯に通い、入浴の合間に温泉寺社に参詣し、体調に応じて商店、名所、自然散策に出かけて地域の恵みを受けながら3週間前後の日々を過ごしていました。この中心にあったのが湯治客同士、湯治客と地域との交流でした（図1）。湯治場の交流は老若男女の誰にでも行えると

ともに、共通の趣味や話題をもつことでさらに親交を深め滞在生活を豊かに彩りました。今日でも山形県折温泉は「旅館はお部屋、道路が廊下、お店が売店」を目指していますが、まさに温泉地は温泉を中心として地域自体が一つの宿のような役割を果しており、そこで多様な交流が育まれてきました。



千葉商科大学  
サービス創造学部  
准教授  
内田 彩

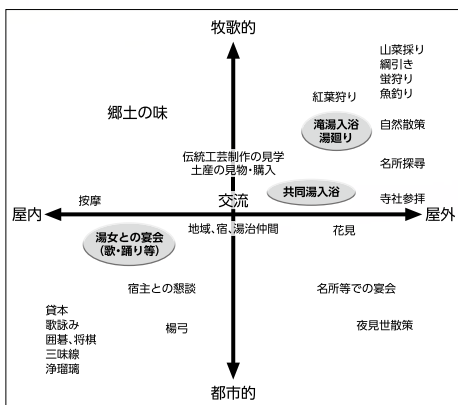


図1 江戸時代の温泉地における保養・観光行動  
(出典 内田彩 (2014) 「湯治文化を生かした温泉地づくり」『観光文化』公財日本交通公社)

### 温泉地の変容

歴史的に振り返れば温泉地は湯治を目